

## 「日本語で読むということ／日本語で書くということ」

日本語は、明治以来の「西洋の衝撃」を通して、豊かな近代文学を生み出してきた。その日本語が、全世界で流通する＜普遍語＝英語＞を前に亡びつつある。日本語は＜普遍語＞と同じように世界と同時性をもって、世界と同じことを考えられる＜国語＞であり、日本近代文学のような小説を書ける言葉である。この、日本語を亡ぼさないために、今一度、「日本語で読むということ、日本語で書くということ」について考えたい。

### ●水村美苗 『増補 日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で』

ちくま文庫



#### 目次

#### 一章 アイオワの青い空の下で＜自分たちの言葉＞で書く人々 7

##### ＜自分たちの言葉＞で書く作家たち

米国のアイオワ大学が主催する IWP に参加しないかという話があったのはその年の春である。IWP とは International Writing Program の略で、国際創作プログラムとでも訳すべきか、世界各国から小説家や詩人を招待し、アメリカの大学生活を味わいながらそれぞれの自分の仕事を続けてもらおうという、大変結構なプログラムである。かれらと顔を終始つき合わせるうちに、私は、いつのまにか、大きな感慨をもつようになった。地球のあらゆるところで、さまざまな作家がさまざまな言葉で書いている—というよりも、さまざまな作家が、それぞれ＜自分たちの言葉＞で書いている。その＜自分たちの言葉＞で書くという行為—それが、＜自分たちの国＞を思う心と、いかに深くつながっていたか。

##### ＜自分たちの言葉＞が亡びる

言葉には力の序列がある。一番下には、その言葉を使う人の数がきわめて限られた、小さな部族の中でしか流通しない言葉がある。その上には、民族の中で通じる言葉、さらにその上には、国家の中で流通する言葉がある。そして、一番上には広い地域にまたがった民族や国家の間で流通する言葉がある。今、言葉は、生まれるよりも勢いよく消えつつある。今までには存在しなかった、すべての言葉のさらに上にある、世界全域で流通する言葉が生まれたということである。それが今、＜普遍語＞となりつつある英語にほかならない。英語圏をのぞいたすべての言語圏において、＜母語＞と英語という、二つの言葉を必要とする機会が増える、すなわち、＜母語＞と英語という二つの言葉を使う人が増えていくことにほかならない。ある民族は＜自分たちの言葉＞をより大切にしようとするかもしれない。だが、ある民族は、悲しくも、＜自分たちの言葉＞が「亡びる」のを、手をこまねいて見ているだけかもしれない。私が言う「亡びる」とは、言語学者とは別の意味である。それは、ひとつの＜書き言葉＞が一ひとつの文明が「亡びる」ように、言葉が「亡びる」ということにほかならない。私たち作家にとっては、＜自分たちの言葉＞が「亡びる」ということは、私たちがその担い手である＜国民文学＞が「亡びる」ということにほかならない。何か日本文学に起こりつつあるのを—日本語が「亡び」つつあるかもしれないのを感じているのである

#### 二章 パリでの話 78

##### 世界でもっとも尊敬されていたフランス語

近代に入るにつれ、力をもってきたのは英語である。だが、世界でもっとも尊敬されていた＜国語＞は英語ではない。それはフランス語であった。フランス語はヨーロッパ文明の神髄が宿る言葉として、国際的な地位を保っていた。フランス語は外交の「公用語」として認められていただけではない。フランス語を話すのは、イギリス人を含め、ヨーロッパ人の教養の重要な一部だとされ続けたのである。フランスの凋落は第二次世界大戦が終わったときには、はっきりしていた。第二次世界大戦の終わりは、フランス凋落以前に、ヨーロッパの凋落を告げた。それと同時に世界中の人々が、アメリカ文化を謳歌するようになり、文化の中心はヨーロッパからアメリカへと移った。それでも、フランス文化は世界でも日本でも、最後の花を大きく豪華に咲かせ続けたのである。ところが、最後の砦であった文化の言葉としても、英語の方が、フランス語よりもよほど重要になってしまったという現実が露になってしまったのである。

##### シンポジウム『日本近代文学—その二つの時間』

明治維新を境にヨーロッパの科学と並んで、ヨーロッパの小説が突然輸入されるようになりました。ヨーロッパの小説は、文学の普遍的なモデルとして、規範として輸入されるようになったのです。日本人はヨーロッパ文学の数々の偉大な作品を原文、ついで翻訳文で、読むようになったのです。近代に入ってから、西洋にながれる時間が、「人類」にとっての普遍的な時間だとされるようになりました。「人類」に参加した日本人は普遍的な時間を生きることとなり、西洋に流れる時間をも生きようになりました。でも、西洋人はといえば、日本に流れる時間を生きることはありません。日本に流れる時間は特殊な時間ではないからです。普遍的な時間に生きる人は、声を上げて話そうとすれば、その声は全世界に届きます。もう一方はそういうわけにはいきません。普遍的な時間と特殊な時間とを同時に生きる人は、普遍的な時間の中で話

す人たちの声は聞こえても、自分の声をその人たちに届かせることはできないのです。日本の作家はさまざまなヨーロッパの言葉を読んだ。このヨーロッパの言葉の多様性が、〈国語〉という観念を日本人に植え付けたのです。国家、その民族の血、その民族の歴史と切っても切り離せない、〈国語〉という観念です。〈国語〉という観念が国民国家の文学—各国に固有の〈国民文学〉という観念を日本人に植え付けたのです。普遍的な時間の中では押し黙っていることを強いられる日本の作家たち。かれらは少なくとも〈国民文学〉としての「日本文学」を、彼らの言葉で花咲かせるのを願うことができたのです。今すべては変わってしまいました。いつのまにか英語という言葉が〈普遍語〉として流通するようになっていたのです。人類の歴史の中で、〈普遍語〉だった言葉がいくつかあります。でもそのような言葉が今日の英語のように世界全体を覆ったことはありませんでした。英語という言葉は、ある時期から、特定の国家とも、特定の人たちの血とも、特定の人たちの歴史ともつながらないものとなったのです。すべての人が、自分の物だと思える言葉になっていったのです。英語で書いている限り、〈国語〉という概念はその根もとから揺るがされ、同時に〈国民文学〉という概念もその根もとから揺るがされるようになりました。

### 三章 地球のあちこちで〈外の言葉〉で書いていた人々 133

#### 〈国民文学〉とナショナリズム

ベネディクト・アンダーソン著の『想像の共同体』である。核心を一言で要約すれば、国家は自然なものではない。「序」の部分の要約すると、国語は自然なものではない。〈国語〉はナショナリズムの母体となり〈国民文学〉を創り、今度はその〈国民文学〉が母体となり〈国民国家〉を創っていく。物理的に存在するわけでもないのに、人がそのために命を抛っていいとまで思う、アンダーソンいわく、「創造の共同体」を創っていくのである。ナショナリズムを育むのに大きく貢献したのが、新聞などの出版物であり、さらには、ほかならぬ〈国民文学〉である。国民文学を可能にしたのが、〈国語〉である。〈国語〉は「出版語」が〈国民国家〉の言葉に転じた時に生まれるものだが、一度生まれてしまえば、「国民」がもつ国民性の本質的な表れだとされるようになる。

#### 学問とは〈普遍語〉でなされる必然がある

〈普遍語〉とは、〈書き言葉〉と〈話し言葉〉の違いをもっとも本質的に表すものだと思っている。〈話し言葉〉は発せられた途端に、その場で消えてしまう。〈書き言葉〉は残る。〈書き言葉〉は写すことができる。くり返して写すことができる。どこまでも広がり地球上のあちこちでさまざまな言葉を読むことができる。読んだ後に、その〈書き言葉〉を使って、自分なりの解釈を書き足すこともできる。人類の叡智が蓄積されつつ広まる。その〈書き言葉〉による人類の叡智の蓄積は、一つの〈書き言葉〉でなされたほうが論理に適う。人類にとって〈書き言葉〉というものは、あたり一帯を覆う、古くからある偉大な文明から伝来したものであった。ある文化が無文字文化から文字文化に転じるというのは、伝来した巻物の束〈外の言葉〉を読めるようになるのをいう。すなわち、その社会に二重言語者が誕生するのをいう。かれらは、その〈書き言葉〉で書かれた〈図書館〉へと出入りできるようになる。〈図書館〉とは、蓄積された書物の総体を抽象的に指す表現である。そのような〈図書館〉に出入りすること—読むという行為は、歴史的には、〈普遍語〉を読むということであり、二重言語者であるのを必然的に強いた。人類は〈普遍語〉を読むという行為を通じてのみ到達可能な叡智を得ることができるようになった。〈叡智を求める人〉というのは、人類が知っていることすべてを知りたいと思う人たちである。かれらが、読むだけでなく、書きはじめることによって人類にとっての〈読まれるべき言葉〉の連鎖がはじまる。学問とは、〈読まれるべき言葉〉の連鎖にほかならず、その本質において〈普遍語〉でなされる必然がある。

#### 〈国語の祝祭〉

〈国語〉とは、もとは〈現地語〉でしかなかった言葉が、〈普遍語〉から翻訳するという行為を通じ、〈普遍語〉と同じレベルで機能するようになったものである。〈国民国家〉の誕生という歴史と絡み合い〈国民国家〉の言葉となる。ヨーロッパで、〈国民文学〉としての小説が満天に輝く星のようにきらきらと輝いたのは、まさに〈国語の祝祭〉の時代であった。〈学問の言葉〉と〈文学の言葉〉とが、ともに、「国語」でなされていた時代である。〈叡智を求める人〉が真剣に〈国語〉を読み書きしていた時代であり、〈文学の言葉〉が〈学問の言葉〉を越えるものだと思われていた時代であった。人々は、叡智に満ちた言葉を〈文学の言葉〉に求めるようになった。小説というものが〈文学〉を象徴するようになったとき〈文学〉は〈学問〉を超越するものとして存在するようになった。〈国語〉という言葉こそ〈小説〉にうってつけの言葉だったのである。この世の〈真理〉には二つの種類があることにほかならない。〈テキストブック〉を読めばすむ〈心理〉を代表するのが〈学問の真理〉、〈テキスト〉そのものを読まねばならない〈心理〉を代表するのが〈文学の真理〉である。〈文学〉で達しうる〈心理〉には、毎回そこに戻っていかねばならない〈読まれるべき言葉〉がある。

### 四章 日本語という〈国語〉の誕生 196

#### 日本語が〈国語〉として成立した条件

日本は、非西洋にありながら、西洋で〈国民文学〉が盛んだった時代に対して遅れずして〈国民文学〉が盛んになったという、極めてまれな国であった。なぜはやばやと日本に〈国民文学〉が存在しえたのか。それは、明治維新以降、日本語がはやばやと、名実ともに〈国語〉として成立したからにほかならない。日本の〈書き言葉〉が、漢文圏のなかの〈現地語〉でしかなかったにもかかわらず、日本人の文字生活の中で、高い位置をしめ、成熟していたこと。日本列島は四世紀、漢文が伝来し、無文字文化から文字文化へと転じた。漢文で書かれた巻物の束を読むのを学び、あたり一帯をおおう〈普遍語〉としての漢文の〈図書館〉に出入りできるようになった。漢字は表意文字である。漢字が表意文字であるがゆえに、日本人は〈自分たちの言葉〉の音を書き表すための文字そのものを〈普遍語〉を翻訳するという行為を通じて、創らねばならなかった。漢文訓読。一番簡便な、翻訳のしかたである。カタカナもひらがなも漢文訓読から生まれた文字—翻訳という行為から派生的に生まれた文字であったが、それぞれ、〈普遍語〉用の文字と〈現地語用〉の文字という、別の道りを辿る。明治維新を迎えるまで、日本の言葉で書かれたものは、〈普遍語/現地語〉という構造の中にあり、それは〈現地語〉でしかなかった。なぜこのように〈現地語〉でしかなかった日本の〈書き言葉〉が、成熟した言葉になっていったか。日本が漢文圏に入り、文字文化に転じたのが大陸からの地理的な近さゆえだとした

ら、日本語が成熟できたのは地理的な遠さゆえである。中国からの政治的、文化的自由を可能にし、日本で固有の文字文化が開花するのを可能にしていた。日本の二重言語者たちは<普遍語>で読み書きしながらも、自然に<現地語>でも読み書きするようになった。そのおかげで、日本語は<普遍>の高みに近づき、美的な重荷を負うだけでなく、時には、<普遍語>と同じように、知的、倫理的な重荷も負うのが可能な言葉になっていった。そこへ、もう一つ、歴史的條件が加わった。江戸時代の資本主義の発達である。日本には印刷の技術があっただけではない。非西洋の中では例外的に資本主義が発達していたのである。印刷資本主義が発達すればするほど<現地語>で書かれたものが流通する。書物の広がりとともに、日本語の<書き言葉>は成熟してただけでなく、すでに驚異的な規模で流通していた。もう一つ欠くことができない歴史的條件があった。それは、西洋列強の植民地にならずに済んだということにほかならない。「維新の志士」たちは、日本を自ら開国することによって、他の非西洋国の運命を避けようとした。日本が独立国家でい続けられるよう、西洋の知識や技術をなんでもかんでも緊急に日本語に翻訳して自分のものにせねばならなかった。二重言語者は、西洋語を翻訳するにあたって漢字を生かし、漢文訓読体を基にした「漢字かな交じり文」を使う。漢字は概念を表す抽象性、さらには無限の造語力をもつ。

#### <普遍語>の翻訳で生まれた<国語>

<国語>というのは、<普遍語>からの翻訳という行為によって生まれるのである。翻訳という行為の根底には、<普遍語>の<図書館>に出入りしたいという人間の欲望がある。そのような人々が翻訳にたずさわることによって、日本語という<自分たちの言葉>が<国語>という高みへと到達したのであった。二重言語者による翻訳を通じて、日本の言葉は、世界と同時性をもって、世界と同じことを考えられる<国語>へと変身していったのである。<国語>へと変身していったことによって、日本近代文学—小説を書ける言葉へと転身していった。

### 五章 日本近代文学の奇跡 247

#### <大学>の役割

日本に日本近代文学が存在するようになったこと。それは、日本に、日本語で<学問>ができる<大学>が存在するようになったという事実めきには考えられない。日本の旧制高等学校や大学の主な役割は、英語、フランス語、ドイツ語という<三大国語>を教え、二重言語者を翻訳者として育てることにあった。非西洋の二重言語者である日本人が、西洋語という<普遍語>をよく読みながら、<普遍語>では書かず、日本語という<国語>で書いた。かれらは翻訳を通じて新しい<自分たちの言葉>としての日本語を生んでいった。その新しい日本語こそが<国語>—同時代の世界の人々と同じ認識を共有して読み書きする、<世界性>をもった<国語>へとなっていた。日本においては、<文学の言葉>こそ、美的な重荷のみならず、知的な重荷と倫理的な重荷をも負う言葉として、はるかに強い輝きを放った<国語>たる運命にあった。

#### 「西洋の衝撃」から生まれた日本近代文学

<国語>は小説から生まれ、小説を生んだ。『三四郎』は、「西洋の衝撃」を受けた当時の日本の<現実>を、まさに<学問の言葉>を使わず、<文学の言葉>を使うことによって、どんな<学問>にも代えがたく理解させてくれる小説である。世界的な視野をもって当時の日本の<現実>を理解させてくれる。漱石を代表とする当時の日本の知識人が大学の外へと飛び出した。大学に身をおいては、自分が生きている日本の<現実>を真に理解する言葉をもてない。「西洋の衝撃」そのものについて考える言葉がない。《日本の開化はあの時から急劇に曲折し始めたのであります。又曲折しなければならぬ程の衝撃を受けたのであります。》まさに漱石が言う「曲折」を強いられた結果、何とおもしろい文学が生まれたことか。日本の文学は、「西洋の衝撃」によって、<現実>の見方、そして、言葉そのもののとらえかたに「曲折」を強いられた。世界観、言語観のパラダイム・シフト(規範・枠組移行:編集部注)を強いられた。だが、日本の文学はその「曲折」という悲劇をバネに、今までの日本の<書き言葉>に意識的に向かい合い、一千年以上前まで遡って、日本語という言葉がもつあらゆる可能性をさぐっていった。そして、新しい文学として生まれ変わりながらも、古層が幾重にも重なり響き合う実に豊かな文学として花開いていったのである。

### 六章 インターネット時代の英語と<国語> 293

#### インターネット時代

インターネットの普及によって<書き言葉>を読むという行為そのものはますます重要になってきているというのに、文学、ことに小説が読まれなくなっている。「文学のおわり」を憂える背景にはまごうことのない時の移り変わりがある。科学の急速な進歩、<文化商品>の多様化、大衆消費社会の実現の歴史的理由によって、近代に入って<文学>と呼ばれてきたもののありがたさが、今、どうしようもなく、加速度をつけて失われていっている。それでいて、文学が終わることはあり得ない。科学が答えを与えられない領域—文学が本領とする意味の領域がある。書き言葉を通じてのみしか理解できないことがある。<叡智を求め人>が<読まれるべき言葉>を読みたいと思わなくなることはあり得ない。本当の問題は、英語の世紀に入ったことにある。<国語>というものが出現する以前、地球のあちこちを覆っていた、<普遍語/現地語>という言葉の二重構造がふたたび蘇ってきたのを意味する。この先、インターネットめきに<書き言葉>を考えることはできない。

#### 英語の<普遍語>としての地位

インターネットという技術の登場によって、英語はその<普遍語>としての地位をより不動のものとしただけではない。英語はその<普遍語>としての地位をほぼ永続的に保てる運命を手にしたのである。インターネットはアメリカで発明された技術である。いずれ実現し得る<大図書館>とは、インターネットを通じて世界のすべての書物にアクセスできるという<図書館>である。多くの人は、たとえ、文字が読めたとしても、<自分たちの言葉>しか読めない。ヒトは、自分が読める言葉の<図書館>にしか出入りすることができない。<普遍語>となりつつある英語の<図書館>だけが、英語を<外の言葉>とする人が出入りする<図書館>なのである。英語の<図書館>はもともと<読まれるべき言葉>が蓄積された<図書館>となっていく。<普遍語>の<図書館>であることによって、世界中の<叡智を求め人>がアクセスし、何がより<読まれるべき言葉>であるかという序列をもつ<世界性>をもって、おのずから創り出す必然性がある。英語が<普遍語>となりつつある事実。英語圏の圧倒的な軍事的、経済的、政治的な力に加えて、近代を通じて

<学問>とよばれてきたものに非西洋人が参加するようになり、<学問>とは本来<普遍語>で読み、<普遍語>で書くという<学問>の本質があり、インターネット技術が生まれたことで、英語への一極化は確実に<学問>の中で広がっている。

### 英語以外の<国語>で書かれたものを読まなくなる

この世には、別の言葉に置き換えられる真理<テキストブック>と別の言葉に置き換えられない<真理><テキスト>がある。<学問の言葉>が<普遍語>になるとは、<叡智を求め人>が、自分の<国語>で<テキスト>を書こうとしなくなる。<叡智を求め人>ほど<普遍語>に惹かれてゆくとすれば、たとえ<普遍語>を書けない人でも、<叡智を求め人>ほど<普遍語>を読もうとする。<叡智を求め人>が読んで欲しい読者に読んでもらえなくなるので、<国語>で書こうと思わなくなる。<国語>で書かれたものはつまらなくなる。<叡智を求め人>はいよいよ<国語>書かれたものを読む気がしなくなる。英語が<普遍語>になったことによって、英語以外の<国語>は「文学の終わり」を迎える可能性がでてきた。<国語>そのものが、まさに<現地語>になり果てる可能性がでてきた。

## 七章 英語教育と日本語教育 334

### 優れたバイリンガルは少数の<選ばれた人>でいい

日本語が「亡びる」という運命を避けるために何をすべきか。凡庸きわまりないが、学校教育というものがある。学校教育とは、ある言葉を教えることによって、その言葉を<国語>に育て上げることもできる代わりに、ある言葉を教えないことによって、その言葉を亡ぼすこともできる。ある言葉で書かれた<読まれるべき言葉>を読ませないことによって、その言葉で書かれた文学を亡ぼすことができる。英語の世紀に入った今、学校教育について考え直すべきだ。どのような国語教育にすべきかについては、まずどのような英語教育にすべきかにかかっている。英語の世紀に入ったということは、国益という観点から見れば、国家が優れて英語ができる人材を十分な数、教育しなくてはならなくなったのを意味する。ところが、日本政府は真の危機感をもつこともなく、無策である。ゆえに、日本には優れて英語ができる人材が十分に育っていない。日本は国際会議に出かけられるだけの英語力をもった政治家さえ育っていない。日本政府の危機感のなさに以前から危機感を持っていた人たちは「英語公用語論」を唱えた。批判を受け立ち消えになったが、その根底にある理念は、日本政府、日本国民のなかで熱く息づいている。日本語はそのまま維持しようというのが大前提になって「国民総バイリンガル社会」を目指しているのである。日本で「国民総バイリンガル社会」を追い求めれば、日本の言語状況はより悪くなる。優れたバイリンガルが十分な数存在するのは、この先日本にとって絶対に必要なことである。それには、少数の<選ばれた人>を育てる以外には実現のしようがない。

### 「片言で通じる喜び」の英語より日本語ができるようになるべきである

私たち日本人が日本語が「亡びる」運命を避けたいとすれば、学校教育を通じて多くの人が英語をできるようになればなるほどいいという前提を完璧に否定し切らなくてはならない。代わりに、学校教育を通じて日本人は何よりもまず日本語ができるようになるべきであるという当然の前提を打ち立てねばならない。<国語>としての日本語を護るといふ、大いなる理念をもたねばならない。非・英語圏において、英語に吸いこまれていく人はふえていかざるをえない。<叡智を求め人>だけでなく、興味がないのに吸いこまれていかざるをえない人もいる。さらなる悲劇は、英語ができなくてはならないという強迫観念が社会のなかに無限大拡大していくことにある。ことに焦燥感を募らせているのは子供を持つ親である。それらの親の要望に応えるということもあって、日本の文部科学省は小学校から「片言でも通じる喜びを教える」ために英語教育を導入すると決定した。英語教育に時間とエネルギーをかけるほど、日本語教育は疎かになる。数学や英語や社会や理科の時間は増やし、国語はそのままである。<自分たちの言葉>である日本語など自然に学べるだろうと、文部科学省だけでなく日本人の多くも考えている。インターネットの時代、もっとも必要になるのは「片言で通じる喜び」なんぞではない。世界で通用する<普遍語>を読む能力である。読む能力とは、外国語を聞いたり話したりする能力の一番重要な基礎となるものでもある。学校教育で、英語を読む能力の最初のとっかかりを与えその先は選択科目にする。必修科目としての英語は「ここまで」という線をはっきり打ち立てる。すべての日本人がバイリンガルになる必要などない。

### 日本近代文学を読み継ぐ国語教育を

日本人を日本人たらしめるのは、日本の国家でもなく、日本人の血でもなく、長い<書き言葉>の伝統をもった日本語なのである。日本人は日本語を実に粗末に扱ってきた。「西洋の衝撃」を受けて以来、非西洋語圏全体を覆う<自分たちの言葉>についての自信のなさがあった。<書き言葉>とは<話し言葉>の音を書き表したものだという誤った言語観である「表音主義」が、西洋から輸入され、浸透していったからである。漢字排除論から、かな文字表記、ローマ字表記、新国字を議論していた。漢字排除論は学者たちの反対もあり、実現しないまま消滅した。戦後「当用漢字表」に沿って漢字の数は制限されたが、日本語は漢字を残した。その代償に、「伝統的かなづかい」が「表音式かなづかい」に改められた。「表音式かなづかい」は日本語を混乱させ、語意識に対する感覚を鈍らせた。言葉の意味というものは、他の言葉との関係にあり、他の言葉との関係がわからなくなればなるほど、言葉全体の命が枯れていくのである。「表音主義」に主眼を置くのをいったん否定し、語意識をもっと生かした<書き言葉>—過去とのつながりをもっと大切にしたい<書き言葉>—というものをこれから考えていくのは可能ではないだろうか。「表音主義」を中心に据えた戦後の国語教育は、「あいうえお」の五十音と最低限の漢字さえ覚えれば、国民すべてが文章を書けるようになるというところに理想を設定した。文化とは<読まれるべき言葉>を継承することでしかない。日本の国語教育の理想を<読まれるべき言葉>を読む国民に育てることに設定しなかったがゆえに、<読まれるべき言葉>が読み継がれなくなっていった。日本語は、<話し言葉>としては特別な言葉ではない。だが、<書き言葉>は、世にも特異な表記法をもつ。漢字という表意文字と、自分たちの表音文字「ひらがな」「カタカナ」を混ぜて書く。そのうえ漢字には「音読み」「訓読み」もある。表記法を使い分けるのが意味の生産にかかわるといふのは、それとは別のレベルの話で、日本語独特のことである。同じ音をした同じ言葉—それを異なった文字で表すところから生まれる意味のちがひがある。日本語のような例外的な<書き言葉>こそが、<書き言葉>は<話し言葉>の音を書き表したものではないという<書き言葉>の本質を露呈させる。それなのに、日本人は<国語>など自然に学べるものだという思い込みから「日本語を大切にしよう」とはしてこなかった。インターネットの普及により、日本語を自然に守ってくれていた地理的条件が無くなり、<普遍語>が飛び交う時代に入った。たった百年前に<自分たちの言葉>で書かれた小説をそのままでは読めなくなりつつある。日本の国語教育はまずは日本近代文学を

読み継がせるのに主眼を置くべきである。翻訳や詩歌も含めた日本近代文学の古典を読ませる。「古典とのつながりを最小限に保つ」—みながそのつながりを保っていれば保っているほど、日本語は生きている。日本文学の豊かさはく読まれるべき言葉>をふつうの人がどれくらい読むかにかかっている。

あとがき 406

文庫版によせて 408

はじめに

この本が出版されたとき、インターネット上で小さな竜巻のようなものをおこし、次第に外の世界へと広がっていった。ハワイ大学でアメリカ学を教えている吉原真理教授から、ぜひ、英訳したいとの連絡があった。英訳が出たのを機会に、文庫という形で日本語でも出版し直すことになったのが、この増補版である。英語という<普遍語>の意味を問い、その力を前に、日本語をどうしたら優れた「書き言葉」として護ることができるか、今、それを真剣に問わねばならない。それは、英語にあらざる<国語>を母語とする人たちの共通の問いである。

### 自然科学と母語の関係、そして、翻訳文化の重要性について

日本人が子供のころから自然科学に興味をもつのは、西洋語からの科学の概念が、それが翻訳であることを意識されないまで日本語に浸透し、ふだん使っている言葉でもって自然科学を学べるからである。そのような広く厚い基盤があって、日本語を母語としながらも、世界的な研究をできる人材が育っている。世界でも、日本でも自然科学者たちは、微妙な思考をするときには、母語で思考せざるをえない。日本語がその言葉でもって科学ができるような言葉であり続けるためには、翻訳文化が、学問でも盛んであり続けることが条件である。『天文台からみた世界の情報格差』という本では、いかに日本語が、アジアの言語でありながら、素早く新しい概念を一たとえそれがカタカナ表記のままであっても—自国語に取りこみ、翻訳を基盤にして<国語>として機能し続けているかがわかる。<国語>がきちんと機能していて、初めて、自然科学の分野でも意味のある研究ができるようになる。

### <普遍語>と<国語>の役割分担

<国語>がいくら立派に機能しようとして、この先、学者として世界に向けて発信するときは、<普遍語>で直接発信する人がますます増えていくことには変わらない。英語で書かなくては、世界の人に読んでもらえない。ドイツ語は、フランス語と同様、きちんとした<国語>として機能し続ける可能性が高い言葉である。そのドイツ語のなかでも分業が進んでいくのはやむをえない。英語に近い分、日本語ほどは翻訳を介さず、「学問の言葉」が<普遍語>になっていく可能性が高いだろう。若い人は、英語の小説を、英語でそのまま読むようになってきている。英語は読むという行為で見れば、「文学の言葉」としても、重きをもってきている。「国語」が「文学の言葉」として生き続けられるためには、「国語」で書かれた文学—母語で書かれた文学が、これから読み継がれていくかにかかっている。

### 続フランス語の凋落

アルゼンチンという国は、明治維新と同じころに国家統一を達成した。移民を優遇する政策によって、ヨーロッパ諸国から移民が続々とブエノスアイレスに集まり、西洋化を進め、世界有数の金持ち国家となった。ブエノスアイレスも「南米のバリ」とよばれるほど、コスモポリタンな都市となった。だが、その後は経済的にすっかりと伸び悩み、私が見たブエノスアイレスはその古き良き時代が化石化されたような印象であった。ブエノスアイレスに住むフランス語の学校で教育を受けた若い女性二人と逢った。今や少数派となりつつある、フランス語を話す若者だった。「フランス語で教育を受けられる語学校は一つしかなくて、英語で教育を受けられる学校は百とあるのよ」英語学校の悪口が自然と続いた。このヨーロッパのある時代で時間が止まってしまった街にも、英語の世紀はやってきているのであった。

### アジアの<国語>の混乱

国際文学祭でインドネシア・バリ島に行った。滞在中、考えざるをえなかったのは、いかに日本が西洋の植民地に危うくなりそうだったかということである。『イザベラ・バードの日本紀行』という本の序章に、「教養ある英国人」でさえも、日本に関して、何の知識もなく、日本という国もどうせ西洋の植民地に違いないと思いこんでいたためだと記されている。バリ島の文学祭で感じ入ったのは、西洋のどの国の植民地であったかが、のちの<国語>の発展に関係してくるのではないかということだ。『言語天文台から見た世界の情報格差』から引用した、東南アジア諸国連合(ASEAN)を例にとった調査結果では、工科大学において自国語で学問できる4カ国—インドネシア、タイ、ヴェトナム、ラオス—には元英国領は入っていない。逆に、自国語で学問できない6カ国—シンガポール、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、ミャンマー、カンボジア—は、元フランス国領だったカンボジアを除いてすべて元英国領である。

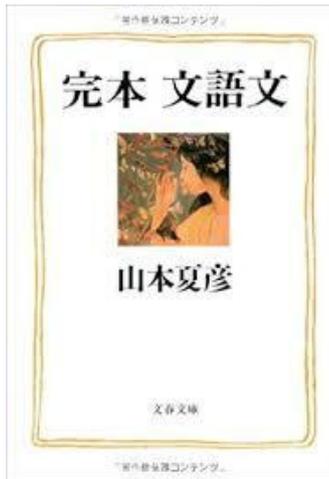
### 近代文学の古典を読み継ぐことの意味

日本の国語教育は、優れた近代日本文学を読み継ぐのに全く主眼を置いていない。西洋語圏の人々、そして、多くの非西洋語圏の人々の間では、自国の近代文学の古典というものは読み継がれるべきだという考えは、広く共有されたものである。近代文学の古典とは、<国語>が成立してからの作品群—大きな困難もなく読むことができ、人によってはそこにしばしば戻り、生涯にわたっての会話が保てるような作品群である。英語圏でいまだに揺るがぬ近代文学の古典をあげるなら、シェークスピアの劇である。彼らは、国語教育において二つの目的を掲げる。その言葉で読み書きができるようになること、その言葉で書かれた古典に触れる機会をもつことである。日本では、古典を読み継ぐべきだという国の方針と国民の合意という前提が共有されていない。<国語>の授業時間は少なく、<国語>の教科書の内容は薄っぺらい。しかも、日本近代文学は教科書には申し訳程度しか載っていない。日本語を<国語>として護るために、優れた日本近代文学を読み継ごうという気運が生まれることを願う。

### 「書き言葉」と占領軍

戦後、占領軍(およびアメリカ教育使節団)によって、日本語をローマ字表記に変えるべきだという提言がなされ、日本の国語審議会でも、ローマ字化が盛んに議論されるようになった。漢字が日本人の識字率を低くしているかを、立証しようと調査が行われたが、立証できず日本語は、ローマ字表記の運命を逃れた。「書き言葉」は、国家権力とイデオロギーによって変わる。しかし、覇権文化に住む知識人は、おおむね文化の多様性を大切にすべきだと信じている。異文化同士がお互いの特性を尊重し合うべきだと思っている。どのように自分たちの言葉以外の言葉を学ぶかは、英語を母語とする人たちも考えるべき問題ではないだろうか。世の中にさまざまな言葉があるのを知るのは、世の中の見方がさまざまであり、世の中を知ることであり、人間として当然持つべき謙虚さを身につけることにつながる。

●山本夏彦 『完本文語文』 文春文庫



目次

I

文語文 11  
 兆民先生 49  
 聖書 60  
 二葉亭四迷の思い出 65  
 一葉の日記 74  
 萩原朔太郎 83  
 佐藤春夫 88  
 訳詩集 93  
 字引 105  
 中島敦 110  
 友垣 118  
 祖国とは国語だ 123

II

言い回しのほう 131  
 私の文章作法 148  
 理科系の文章読本 155  
 口語文 163  
 東京なまり 168  
 耳で聞いて分る言葉 172  
 わが語彙 177  
 綺堂のことば 182  
 伊曾保物語 190  
 機械アルモノハ必ず機事アリ 195

III

明治の語彙 205  
 あとがき 318  
 解説 徳岡孝夫 322

●新井紀子 『AIに負けない子どもを育てる』 東洋経済

人間のもっとも優れているところは、意味を理解出来ることです。また、言葉と論理と数量のタネも生まれながらに備わっています。外界や身近な大人に高い関心を持つ幼児期から低学年の間にそれらを観察したり真似たりする機会が必要です。4年生に入るところになると、学力の差が生じやすくなります。それは、主観から客観へ、絶対から相対へ、具体から抽象へとジャンプが必要になるためです。これらは、日常生活ではなかなか身につかず、「言葉」と「論理」を通じて獲得する以外に道はありません。ドリル・暗記型になるか、論理で考えられるかで学力差が生じます。(AIに負けない子どもを育てる/新井紀子/東洋経済 第9章より抜粋)



第4章 リーディングスキルテストの構成 081  
 <係り受け解析>文の基本構造を把握する力 083  
 <照応解決>代名詞などが指す内容を認識する力 085  
 <同義文判定>2つの文の意味が同一かどうかを判定する力 087  
 <推論>基本的知識と常識から、論理的に判断する力 089  
 <イメージ同定>文と非言語情報(図表など)を正しく対応づける力 092  
 <具体例同定>定義を読んでそれと合致する具体例を認識する力 094

第5章 タイプ別分析 097  
 理数系が苦手?〈前高後低型〉 098  
 自力でもっと伸ばせる〈全分野そこそこ型〉 100  
 中学生平均レベル〈全低型〉 101  
 知識で解いてしまう〈前低後高型〉 :はずれ値① 104  
 読解力ばっちりくすべて10点満点型) :はずれ値② 105  
 診断に納得できない方へ 107

第6章 リーディングスキルテストでわかること 113  
 リーディングスキルテストは「視力検査」に似ている 114  
 「きちんと読む」は結構疲れる 119  
 RSTは読解力のみを測っている 124  
 RSTの妥当性と信頼性 129  
 RSTの「余地能力」136  
 RSTから始まる「教育のための科学」142  
 入試は「暗記」か? 147  
 日本だからこそ生まれたRST 150  
 RSTという枠組みの「威力」156

第7章 リーディングスキルは上げられるのか? 163  
 リーディングスキルテスト使用上の注意—「練習しないでください」164  
 違います!それ、完全に間違ってます!! 166  
 それでも、「うちはする」169  
 日本はアクティブラーニング先進国 174  
 「みんなちがって、みんないい」は罪作り 177  
 2Bの世界 182  
 立山町の衝撃 186  
 6年生までに穴埋めワークシートを卒業する 191

第8章 読解力を培う授業を提案する 201  
 「正しく伝えよう」—紙上授業1 203  
 「正しく伝えよう」—授業解説 215  
 「言葉のとおり」に図形を並べよう—紙上授業2 224  
 偽定理を探せ—紙上授業3 240  
 遊びながら文章の構造を理解する—休み時間 256

「国語」とは何か 260  
 「論理国語」と「文学国語」266  
 第9章 意味がわかって読む子どもに育てるために 275  
 幼児の権利 276  
 「意味がわかって読める」ために 280  
 ITはどこで使うの? 295  
 公立学校の復権が地方創生のカギ 299

第10章 大人の読解力は上がらないのか? 308  
 菅原氏の体験談:大人が読解力を身につけるために 308

おわりに 321

目次

はじめに 001  
 第1章 AIの限界と「教科書が読めない子どもたち」 011  
 「東ロボ」は何を目指したのか 012  
 日本人のAIリテラシーを向上させた「東ロボ」018  
 「東ロボ」からリーディングスキルテスト(RST)へ 022  
 教科書が読めない子どもと大人 027  
 第2章 「読める」とはなんだろう 031  
 正しく「読む」ために必要なこと 032  
 AI読みでは、AI人材にはなれない 040  
 国語は何のためにあるの? 045  
 第3章 リーディングスキルテスト、体験! 047

## 「世界のともだち ベトナム」 11

“ふたごのソンとチュン”

写真・文 鎌沢久也 / 偕成社



鎌沢久也

ベトナム南部カントー市近郊にあるプートゥー村。メコン川沿いに水田や果樹園が広がるこののどかな村で、11歳のソンとチュンの双子の兄弟がくらしています。一家はお父さん、お母さん、お姉さんと同居しているおじいさんの6人家族です。ジャックフルーツなどの果物を栽培する果樹園を営んでいます。お父さんは明るいお母さんのことが大好きで仲のいい夫婦です。お姉さんは、ふたりがいたずらをするのがすぐしかってくれる、いいお姉さんです。ソンとチュンはプートゥー村にほかの双子がいないこともあって、村の有名人です。ふたりはそっくりな顔に好きなものも似ていて、学校の成績も両方ともとても優秀。似ているところが多いですが、性格は少しだけちがうようです。兄のチュンはどちらかというとマイペースな性格。ひとりで工作をして遊ぶのが好きです。手先がとても器用で、物ごとにじっくり取り組む性格のようです。弟のソンはチュンにくらべ、やんちゃなところがあります。おもしろいことをして家族を笑わせるのもソンのほうです。ふたりともよく家のお手伝いをしますが、洗たく物が雨にぬれているのに気がついて服をとりこむのはいつもソンです。ソンとチュンの家は、果樹園の敷地の一部にある1階建ての家です。この辺り一帯は「クリーク」とよばれる小さな川が無数にはりめぐらされた地域で、家の前にも川が流れています。家には水道がないため、川からさらに家の敷地へ用水路を引き、その水を生活用水として使っています。ベトナムでは朝ごはんや昼ごはんをそれぞれ屋台で食べたり、買ってきたりすることが多いので、夕ごはんが家族で集まって食べる大切な食事です。ベトナムでの食卓では、生野菜が豊富にならびます。野菜でいろいろな料理を包んで食べるのです。ふたりは包丁を使うのも、春巻を包むのもなれたもので、台所仕事をいつも手伝っています。テーブルにライスペーパーを用意し、めいめい水でもどして、揚げた春巻、野菜、麺を包んで食べるおもしろい食べ方もあります。一家はみんな朝5時に起きます。ソンとチュンは制服を着て身じたくをし、6時には家を出発。学校へ着いてから授業が開始までは時間がたっぷりあります。じつはこの時間が子どもたちのお楽しみするとき。ふたりは、毎朝学校の門の外の屋台か、学校の中の食堂で朝食をとります。学校は2部制で、学年によって午前と午後に分かれています。ソンとチュンの学年は朝7時から授業をはじめ、11時10分には終了します。ソンの好きな科目は英語で、チュンが国語（ベトナム語）だそうです。ベトナムの旧暦8月15日（日本の9月ごろ）に、子どもの日を祝う習慣があります。この日は夜になってから、紙で作った船に明かりをとめて川に流します。紙の船とカラフルなちょうちん、お菓子の月餅が子どもの日の必需品です。ソンとチュンの両親は子どもたちが元気に育つように願いました。ソンの夢は軍隊にいるおじいさんを尊敬していて「軍人になりたい」といい、チュンは「医者」という。これからも仲良くいっしょに成長していく世界のお友達の日常を是非覗いてみてください。

## 「世界のともだち カンボジア」 12

“スレイダー 家族と生きる”

写真・文 古賀絵里子 / 偕成社



古賀絵里子

プノンベン郊外、250人ほどが住むタナム・チュロム村。ここで13才のスレイダーはくらしています。スレイダーの家族はお父さん、お母さん、お姉さん、妹の5人家族。働きもので料理上手なお父さんはバイクタクシーの運転手。お母さんは家の軒先で小さな売店を開いています。スレイダーは小さいころに本当のお母さんを亡くしましたが、お母さんはスレイダーたちをわが子のように育ててくれています。家族が大好きなスレイダーの夢は、ヘアメイクアーティストになって美容室を開くこと。もうひとつの夢は、果物を仕入れて村で売り歩き、お母さんを助けることです。海外の支援団体から学費をもらえるようになり、最近は学校に休まず通っています。以前は家の仕事を手伝いながら通学していたので勉強がおくれてしまい、今3学年下のクラスで勉強しています。住んでいる村では廃品回収で生計を立てる家族が多く、リヤカーをひいて一家みんなで働いているすがたをよくみかけます。ここに住む人たちは生活がくるしくてもおたがいたすけあってくらしています。時には出産の手つだいをすることもあります。スレイダーの家の朝。お父さんとお母さんは朝4時に市場まで仕入れに出かけます。スレイダーはお父さんたちが帰ってくる前にお姉さんとお店の準備や家事をはじめます。カンボジアは両親がともにたはらっている家庭が多く、家事や育児は男女関係なくできるほうがします。お父さんもお母さんが店番をするかたわらで朝ごはんのおかずを作りはじめました。スレイダーもお父さんに教えられながらフライパンをにぎります。朝、昼、晩、白いごはんは1品のおかずが定番です。1日2食のときもあります。ひと皿のおかずをみんなでわけあって、朝ごはんです。「お父さんが作る料理がいちばん好き！」スレイダーはおいしそうにほおばりました。スレイダーは学校が大好き。毎日楽しく通っています。カンボジアでは、公立の学校は小学校から中学校までは無料です。学校まではむかえのトゥクトゥクに乗って、村から15分。スレイダーの通う小学校の校舎は、日本からの寄付でたてられました。午前と午後、ふたつにわけて授業がおこなわれ1か月ごとに交代します。スレイダーは午後の組です。授業は算数、国語（クメール語）、理科、社会の4科目。好きな科目は算数で成績はクラスでまんなくらいのようです。休み時間には、たくさんの子が校庭に出て遊びます。今はやっている遊びは、ゴムとびや長なわとび。家事やお店の番がいそがしく、学校以外で遊べる時間が短いスレイダー。遊べるときは思いきり楽しみます。そんなに遠くない過去、カンボジアにはポルポト政権という悲劇の時代があり、罪もない人たちがたくさん犠牲となりました。音楽家だったお父さんの両親も、お父さんが小さいころに殺されました。その後、お父さんは養母となってくれたおばあちゃんに育てられ、いつもお父さんを助けてくれました。お父さんはおばあちゃんにとっても感謝していて、これからもできるだけ親孝行をしたいといっています。大好きな家族にかこまれた幸せいっぱいの世界のお友達の日常を是非覗いてみてください。

## <<国境を越えて>>

### □ベトナムから日本へ ~8歳の誕生日の早朝~

今から21年前(1988年)、8歳の誕生日の早朝、母に起こされ、「日本に行くよ」と言われた。日本に行くことは知っていたけれど「まさか自分の誕生日に出発するなんて」と気持ちの整理がつかないまま着替えをした。いつもなら友達を呼んで、パーティーを開き、プレゼントをもらったり、ケーキを食べたりと楽しい時間を過ごすはずなのに……。バスに乗るまでの間、近所の人たちと写真を撮ってお別れをしているときも、頭の中では「私の誕生日なのに何で」とずっと思っていた。空港に着いて、「おばあちゃんともう会えないんだな」と思い、妹と大泣きで、母に手を引っ張られながら別れをした。飛行機の中でも、しばらく私は泣いていた。母も泣いていた。

### 日本で父と4年ぶりに再会

日本に着いて、父と会えてすごくうれしかった。これからは、ずっと一緒に過ごすことができると、わくわくした。しばらくして、小学校に入ることになった。小学校2年生だったが、日本語が一文字も分からなかったのので、1年生からやり直しをした。教室に入り、席に座ると、休み時間に皆が集まってきて話しかけてきた。私は言葉が分からないので、ベトナム語で話しかけたが、もちろん通じない。「何で通じないのだろう、ベトナム語が何で分からないのかな」と思っていた。

### いじめに遭っても

それからしばらくして、言葉が通じなかったせいか、いじめに遭った。先生も理解してくれず、学校が嫌になり、家に帰って、ベトナムに帰りたいと母に泣きながら訴えた。母は「もう帰れないよ。ここが私たちの住む場所なんだよ。頑張っていけないといけない」と言った。父はその様子を見て、ひらがなや漢字のドリルを何冊か買ってきてくれた。毎日数枚書くように言われ、父も一緒に勉強に付き合ってくれた。指が痛くなるまで、絶対に負けないぞと思いながら頑張っていた。その後2度の引っ越しをして、なんとか無事に中学、高校へ進むことができた。

### 反抗期の父の言葉

高校生の時に反抗期を迎えた。親の言うことに対して、いつも冷たい態度。言うことをきかず、怒鳴ったりして、素直になれないときがあった。勉強もあまりしたくなく、成績も下がった。父は私の将来が心配になり、妹も交えて母と4人で話をするようになった。私がなぜ反抗的な態度をとるのかを聞いてから、ゆっくりと次のように言った。

### 家族がそろっていれば幸せ

「おれはお前たちの将来を考えて危険な目に遭い、乗り越えて日本に着いた。お前たちは幸せだよ。日本に来られて、住む場所があり、着る服もあり、食べるものもあって、勉強できる時間もある。必要な時に使うお金があり、面倒をみてくれる人(親)がいる。それなのに、なぜそれを大事にしない。考えてみなさい。ベトナムにいたら、安心して暮らせていたか。こんな暮らしができたか。時は待ってはくれない。今この時を大事にし、勉強を頑張らないと、将来困るのは、お前たち自身なんだ。親はいつまでも、そばにいられない。だけど、お前たちの一番の見方で、うらぎらない。親の言うことは絶対ではないから、聞かなくてもいい。だがその態度は、失礼にあたる。おれは、家に帰ったら、家族がそろっていれば、それだけで幸せなんだ。」父は涙ぐみながら言った。母は「せっかく自由の国に来られたんだから、頑張って勉強しなくちゃ意味がない」と言った。私と妹は、涙でいっぱいになり、何も言えなかった。自分のしてきたことがとても恥ずかしくなり、自分の態度や行動を振り返って深く反省した。

### 川島の名前の由来



それからは勉強を一生懸命頑張って、無事に都立の看護専門学校に入学した。1年生の時に日本に帰化して「川島成美」となった。なぜ「川島」なのか父に尋ねると「ベトナムから川に出て海に入り、日本の島にたどり着いたから川島」と。父の思い出もあり、すごく納得した。深い意味のある名字だと感心した。「成美」は「これから物事が美しく成功するように」との思いを込めて、自分で付けた。3年間の課程を修了して卒業できたが、看護師の国家試験に落ちた。看護助手として病院で勤務しながら勉強し、再度受験して合格、看護師として働くことができた。

### 職場結婚

3年後、聖太さんと職場で出会い、結婚することができた。結婚前のデートでいろいろ話をして、家族の大切さをさらに深く知ることができた。中学生の時、知り合いの人から聖書をもって読んで。神様という存在、人類はどういうふうに造られたかを知り、理解できた。友達にも話したが真剣には聞いてもらえなかった。聖太さんがクリスチャンであることを知り、とてもうれしかった。彼なら私の考えを分かってくれると……。そして悪い人ではないと確信した。

### 福音がもたらす喜びと平安

教会に来て、とても温かいものを感じることができた。福音を知り、私の生活が変わり、家族を大事にしなくては行けないという気持ちが、一層深く、強くなった。また神様の存在を、さらに近くに感じることができ、頑張ってきたと思う。また教会に来ると、不思議に気持ちが楽になる。天のお父様が、私の悩みを取り去ってくださったのだと思う。天のお父様が父を日本に導き、こうして皆様と出会わせてくださったと信じている。苦労してきたことも、きっと備えられていた道であって、そのことにも理由があったのだろうと、改めて考え直す時間があった。心から感謝の気持ちでいっぱいである。今考えると、ベトナムを出発したあの日は、私にとって、神様からの掛けがえのない、とってとても大切な贈り物(プレゼント)だ

ったのかもしれない。イエス・キリストの福音は、私たちが素晴らしいことで満ち、幸せな気持ちにしてくれる。この教会が真実であることを知っている。●2009年2月22日(日)町田の教会でのワード大会(聖餐会)で述べたお話から。

### 川島家族の歩み

ベトナム戦争が終結(1975年4月30日、サイゴン陥落により、南北に分断されていたベトナムは、統一された)してから34年が過ぎようとしています。今では、過去の産物となってしまったベトナム戦争ですが、300万人以上もの死者と大量の難民を出しました。彼らは自由を求めて世界中に散らばっていったのです。その自由への逃走には、多大な犠牲が伴いました。家族や恋人との離別、そして自らの命を失う危険を覚悟しての祖国脱出でした。ベトナムを出国した彼らは、アメリカ、イタリア、カナダ、日本などの国に新たな生活の場を求めました。たとえ異国にしようとも、彼らの心から故郷ベトナムが消えることはなく、離ればなれになった家族への思いは、彼らの絆をより一層強いものにしました。1984年に父親の川島一郎は家族を残し、小さなボートに乗り込み、他の48人と共にベトナムを脱出しました。数日、大海原を漂流し、飲料水も底をつきかけていたところ、日本の船に救助されました。それから4年後、妻と子供たちを日本に呼んで、4人家族の生活が始まりました。長女・成美8歳、次女・智江4歳のときです。その後、長男・勇徳が誕生しました。(現在高校3年生)。川島家族がベトナムを脱出して日本に帰化するまでの出来事は、2年前、中央大学を卒業した智江さん(次女)の卒業論文に詳しく記されています。●ナルミさんからのVOICE■  
※次号(千の声 VOICE 秋号 N010)より成美さんの妹・智江さんの卒業論文の一部を連載予定(御期待ください)

### □メキシコ旅行 7日目 ~2019年5月6日(月)~

メキシコシティ滞在の最終日。母と私は再びCoyoacan(コヨアカン)に行くことにした。今まで出かけるときには、義姉が貸してくれた車を主人が運転してくれていたが、今日は別行動。足がないので、地下鉄とUberを乗り継いで行くことにした。私はタクシーでもよかったのだが、主人は絶対にUberの方が安全だという。前日、母はタクシーで嫌な思いもしているので、初Uberは使い方も分からず若干面倒な気もしたが、携帯にアプリを入れ、使い方を確認して出かけた。Coyoacanでは、地元の人がよく行く市場を一巡する。母と私は日本人気質もあり、大勢でワイワイ出かける時には楽しくても遠慮もあって欲しいものをゆっくり見られない感覚がある。息子もいないので、落ち着いて買い物を楽しみ、前回はお腹がいっぱいで食べられなかったEsquites(エスキータス)\*とChurros(チュロス)を食べた。移動に公共の交通を使うと、やはり疲れる。空調の行き届かない地下鉄の空気はいつもよりも薄い気がするしUberを利用する時にも、変な所に連れて行かれないか場所を確認しながら乗っていることになる。3時ぐらいに疲れ果てて宿に戻ったが、程なく主人と宿に戻ってきた息子もなんだか元気がない。でも、息子の場合は疲れていたというより、日本に帰りたくないと言って、帰りの車でずっと泣いていたらしい。それでも、私たちが荷物をまとめている間、ソファに寝転がって、日本から持ってきた漫画を一旦読み始めると、集中して何も耳に届かなくなり、なんだか急に日本人モードになったように見える。翌日は出発が早い。私たちの滞在期間中、ずっと貸してもらっていた車を返し、お別れを言うために、義母の家に行く。寂しがるメキシコのおばあちゃんの前で、「おばあちゃんが寂しくないように、枕に僕の手形を残しておいたよ」という息子が、あどけない子供の表情をしていて、とても愛らしかった。



### □メキシコ旅行 8日目 ~2019年5月7日(火)最終日~

早朝5時に宿を出て、空路カリブ海のリゾート地、カンクンに向かった。メキシコシティでの滞在はとても充実していて楽しかったけれど、カンクンのビーチは最高に美しく、初めて行ったチェチェンイツアのピラミッドやセノーテ\*\*も素敵で、やはりカンクンにも寄ってよかったと思える魅力に溢れていた。5年前、日本に帰国する前に来た時と同じホテルに滞在し、あの時はああだったか言いながら、のんびりと本当に休暇らしい休暇を過ごすことができた。息子はホテルでアメリカ人の子供たちと一緒にビーチバレーをする機会があったようだが、英語が全然分からなかったと報告してくれた。話している言葉が全然分からないという体験は、もしかしたら息子には初めての経験だったのかもしれない。カンクンからヒューストンまでの飛行機でも、機内放送が分からない、と連発していた。

今回、5年ぶりにメキシコを訪問し、なによりも私は、途上国に溢れるエネルギーみたいなものを新鮮に感じた。滞在先のマンションから街を眺めると、Uber EATSのリュックを背負って自転車をこぐ人がいて、昔のように笛を吹きながら焼き芋を売る人がいて、いつものように車のクラクションをこれでもかと鳴らす人々がいた。地下鉄車内ではスラングを連発する若者が物を売り、雨が降るとどこからともなく雨合羽や傘を売るおじさんが現れ、旧市街の歩行者天国では警官の目を盗んで露天をひろげるおばさんがいた。「日本はまじめすぎる」と言った息子は、メキシコでの生活をよく感じ、両国の差を一言で言い得ていたと思う。メキシコには、ごちゃごちゃしたカオスがあり、活気があり、みんなたくましく必死で生きているのに、どこか優しい。脱力していても生きていける安全が保障された日本の生活は、綺麗で、便利で、時間厳守で、快適ではあるけれど、それゆえに堅苦しく、真面目すぎるように見えるのだろう。かつて海外を目指した自分も、日本の外に、別の魅力を感じていたことは否めない。日本にはお金で買うことのできない安全があり、だからこそ幼い息子連れて家族で日本へ移住したのだけれど、今回は旅行者の気楽さもあって、メキシコの魅力を存分に感じる事ができた。今回の旅行の宿泊先のマンションの警備員はベネズエラ人で、母国の

## <<国境を越えて>>

政情不安から、家も車も残してメキシコにやってきたと話してくれた。朝の5時にUberで空港に連れて行ってくれたドライバーはアルゼンチン人のおじさんだった。アメリカの入国審査では、最初は真面目な顔をしていた審査官が、息子には笑顔でスペイン語で話しかけてくれた。日本ではできない体験をたくさんしてこれたと思う。そして改めて、息子がメキシコ人であることを、頭で理解するのではなく、肌で感じるように「わかる」旅となった。家族みんなが今回の旅を満喫できたので、息子が親の手を離れてしまう前に、また一緒にメキシコに行って、また一緒に楽しみたいと心から思った。

\* Esquites (エスキータス)：カップにいれた茹でたトウモロコシの実に、レモン、マヨネーズ、粉チーズ、唐辛子パウダーをかけて食べるメキシコの軽食

\*\* セノーテ：中米ユカタン半島の低平な石灰岩地帯に見られる陥没穴に地下水が溜まった天然の井戸、泉のこと (Wikipedia より) 今回訪れたセノーテイキルでは、泉の中で泳ぐことができる。

●ナオキ君(小4)のお母さんからの VOICE■

### □キューバから南米へ ~あこがれのキューバから好奇心に導かれて~

よく「スペイン語の勉強は大学でしたのですか」と



聞かれることがあるが、私の場合、社会人になってからキューバに旅行をし、キューバに興味を持ったことがきっかけになっている。初の旅行後から長期滞在でキューバに行くまでの2年間、在外公館派遣員試験というテストに合格し、キューバの日本大使館で働くことを夢見ながら学んだのが最初である。試験合格は、社会主義国キューバでなんとか仕事をするための苦肉の策だったけれど、英語と異なり、スペイン語は基礎知識ゼロからのスタート…なんとか一通りの文法は終えたけれど、覚えた語彙は非常に限られており、一次の語学試験を突破することはできなかった。スペイン語を勉強していた2年のうちに、海外で暮らす決心はできていたので、試験終了後、私は自力でキューバに行くことにした。でも実はこの時、まずはもう少しスペイン語を学ぶために、勉強をする環境が整っているメキシコ

に行こうかキューバに行こうかずっと迷ったことを覚えている。けれど最終的に、初心貫徹、キューバの首都ハバナで半年から一年語学の勉強をして、その後チャンスがあればメキシコのカンクンに渡り、観光ガイドの仕事を探してみるのも面白そうだなと思うようになった。

#### アメリカで同時多発テロが渡航の数日前に起き

アメリカ方面の飛行機は一時すべて欠航になったが、私が予約をしていたデルタ航空は、出発日、奇跡的に運行を再開していた。「今がチャンス」と思った私は、基本的にキューバ行きには合意してくれていたものの、タイミングが悪いという母を説得してキューバへ向かった私にはこの時、ハバナに住んでいるタニさんという日本人の知り合いがいた。今回は初めからホテルではなく、Casa Particular と呼ばれる民宿に滞在するため、タニさんに頼んでいくつかよさそうところを紹介してもらった。驚いたことに、キューバには日本人の留学生がたくさんいた。大学の交換留学で来ている子から、短期語学留学生、それにダンスレッスンを受けている人など様々だったけれど、私が滞在を決めた先にもヨシミちゃんという日本人の女の子がいた。先のアメリカ短期留学の経験から、外国にいながら日本人でかたまって生活することには抵抗があったけれど、キューバの家にはどこかしら我慢し難い欠点があり、日本人好みの家は限られていた。私が最初に滞在をした家は、洗濯機があり、シャワーとトイレは共同ではなく個別になっていたが、水シャワーしかでなかった。だからシャワーを浴びたい時は、スチールのバケツに水を張ってそれごとガス台で温め、その熱湯をもう一つのバケツの水と混ぜて適温にして浴びていた。一度、dueño (ドゥエニョ) =家主が留守で面倒になった私はそのまま水シャワーを浴びたことがあったが、しばらくすると気分が悪くなり、自分のはやまった行動を後悔した。9月のハバナは湿度が高くてジメジメしていた。エアコンはもちろんのこと、扇風機もないから、温度の調整が難しく、体を壊す人も多かった。

#### 2年間分のキューバへの思い入れもあって

到着直後の私は、キューバに適応しようとかかなり奮闘していたのだが、今から思えば肩に力が入りすぎていると思う。キューバで長期滞在をするためには学生ビザの入手は必須で、ビザの取得のしやすさから滞在先からは少し離れた Instituto Superior de Arte (キューバ高等芸術院=ISA) の外国人向けのスペイン語コースに入学を決めたけれど、授業は週に2回しかなかった。レベル分けテストでは、RとLの発音を使い分けられないという理由で、初心者レベルとなった。全くのスペイン語初心者と同じクラスとなり、日本で2年とはいえ必死に勉強してきた私は、プライドも傷つけられたし、初歩から始まる授業はつまらなかった。また学校がない残りの週3日はプラーベートのスペイン語レッスンを受けることにしたのだが、こちらも正直なところいらいらするほどスローペースで授業が進み、モチベーションをキープするのが難しくなっていた。ISAまでは歩いて行けないので、バスで通学することになったが、バスが時間通りに来ることはまれだったし、来ても満員で乗れないことが多々あった。そしてなんとか乗り込めたとしても、車内はいつも熱気がこもっているのぼせそうなほど暑く、学校に着く頃にはヘトヘトになってしまうのだった。私は週2回とはいえ徐々にバスでの通学を諦め、少し割高でも maquina (マキナ) と呼ばれる乗合タクシーで通学するようになった。観光客としてキューバに来た時、時代が遡ったような錯覚を抱いた、クラシックカーの乗合タクシーだ。最初の数回こそマキナに乗り込む時にはワクワクしたけれど、こちらもルートがあるため、自分の行き先のマキナが来ないと、路上で延々と待つことになる。やっと来ても満員だったらそのままスルーされてしまうし、かなり混んでいる

のに停まった場合は、キューバ人同様、お尻でぎゅうぎゅう押し合いながら乗り込むのである。こんなハードな環境下で生活をしていると、にこやかなキューバ人にはなかなかお目にかかれなかった。みんな貧しいが故の生活の不便さに、耐え忍びながら毎日を生きていた。私の憧れていたキューバ生活は、タフでなければ生き延びられないシビアな世界だった。

### 渡航して2ヶ月目の11月、Michell(ミシェル)と呼ばれるハリケーンが

キューバに上陸した。この間、2日間に渡ってガスが止まり、3日間電気がつかなかった。甚大な被害を恐れて、政府はハリケーンの上陸前からガスや電気を止めてしまったのだ。もちろん学校も休校となった。私が宿泊していた家のドゥエニョは、60歳ぐらいのキューバ人男性で、離婚してひとり暮らしだった彼には3人ぐらい恋人がいて、彼女たちが入れ替わり立ち代り遊びに来る姿を私は何度も目撃していた。普段はこのドゥエニョと日本人留学生のヨシミちゃん、そして私の3人は基本的に別行動でバラバラな生活をしていただけで、ハリケーンによる apagón (アパゴン) = 停電の間は何もすることがなく、というか何もできず、みんなで身を寄せるような生活となった。近所に住むおじさんの家に招待されて、その家の屋上でラムを回し飲みながら、みんなでドミノをした。酔っ払いたいからではなく、肌寒いからラムをチビチビ飲むのである。夜になると小さなランプの明かりを頼りにドミノを続けた。何もやることがなくて暇だった。ふと空を見上げると星屑をちりばめたような夜空が広がっていた。このハリケーン騒動で、キューバ到着後から張り詰めていた肩の力が急に抜け始めた。そうすると今まで見えないふりをしていたキューバの生活の難点にも、冷静に目がいくようになってしまった。ISAのスペイン語の先生はどう鼻厖目に見てもあまりやる気があるようには見えず、クラスメイトの質問にも答えられないことが度々あった。そんな先生にRとLの違いも分からないと言われたことが内心気にいらなかったし、彼女は生徒に熱心に教える代わりに、公用車で学校まで送迎をしてもらっていた大使館で働くある欧米人夫婦と仲良くなって、なんとかその車にせてもらって一緒に学校まで来ようとしているのが、誰の目にも明らかだった。プライベートの先生は親切だったけれど、いくら私が知っている内容でも決して先には進めてくれなかった。

こんな留學生生活の倦怠期、気がつけばキューバ人と積極的に交流するより日本人の留學生仲間とコンサートやライブに行くことが増えていた。学生ビザを持っていた私は、キューバベソの現地価格でコンサートに行くことができ（外国人ツーリスト向けには米ドル払いのツーリスト価格がある）、日本なら数千円以上するコンサートチケットを100円以下で買うことができた。キューバ人男性と日本人女性のカップルも周りには多く、彼らが仕入れてくるライブ情報をもとに、みんなで出歩いた。よく顔を合わせるキューバ人は、友人というよりは誰かの恋人で、男女を問わずキューバ人の友人はひとりもできなかった。思い描いていたキューバでの生活と違うことに内心あせりも感じていたけれど、どうすれば問題が解決できるのかよく分からずにいた。

### そんな時、地方に住むキューバ人の知人を訪ねに行くという日本人に

同行させてもらう機会があった。サンチアゴ・デ・クーバというキューバ第二の都市、そして小さい町を2カ所ぐらい訪れた。宿泊先は基本的に知人のキューバ人宅となったが、ある家は家畜小屋の並びに掘立小屋があり、そこがトイレになっていた。この町は一部の中心地を除いたら外灯が全くなくて、夜の8時ぐらいになるともう真っ暗だった。一度この中心地でイベントに参加したことがあったけれど、その帰り道、本当の暗闇というのを私は生まれて初めて体験した。舗装されていない凸凹道を、キューバ人はどんどん進んでいったが、私は闇に目が慣れなくて、時々足がすくんでしまった。この町での体験は強烈で、翌朝目を覚ましたら、家の中をひよこが3匹横断しているところだった。断水が頻繁に起きていたためか、大きなドラム缶に水が溜まっていて、その水をカップですくいながら顔を洗った。家の外に出ると、昨夜歩いた真っ暗闇の道にはブタがいて、泥水に体をこすりつけていた。なんだか別世界に迷い込んでしまった感じがしたけれど、ご飯はすごくおいしかった。別の町の家では、写真を撮って送ってあげると言ったら、その家の奥さんが何年ぶりかと言いながら、慌ててお化粧を始めたその姿が印象的だった。地方はハバナとは比較にならないぐらい貧しかった。人はみんなのんびりして優しく、ハバナの多くの人がいかにお金目当てで動いているかが、逆に浮き彫りになってしまったが、ここでの生活が続けるのはとても無理だった。キューバに外国人として、お客さんとして滞在させてもらうことはできても、キューバ人と同じように肩を並べては生きられないと思った。キューバ人と外国人の間にある、見えないけれど高い壁を垣間みた気がした。

ちなみにこの旅行の主催者は、もともとバックパッカーでスペイン語は初心者だったけれど、私よりもはるかに流暢にキューバ人と話をしていき、交渉もうまかった。私にキューバに留まるのはもったいなからと、南米行きを強く勧めてくれた。スペイン語の勉強は他国でも、いくらでもできるとのことだった。

その後、ハバナで出会ったカンクンで働く日本人が、昼夜逆転で空港とホテルの送迎の仕事ばかりしているという話を聞いて、私の心は決まった。

### 年が明けて2002年1月中旬

私はパナマ経由エクアドル行きの機内にいた。憧れの国キューバを、わずか4ヶ月で後にすることにした。これからどうしていいか、はっきりとした計画はなかったけれど、不思議なことに、日本に帰るという選択肢は思い浮かばなかった。

不安でいっぱいだったけど、それを上回る好奇心をおさえることができず、より遠くに向かって突き進んでいった。

●キョウコさんからの VOICE ■(次号へ続きます)



# アンとア+のものがたい(成長日記)

☆アン: 読書・新体操・バレエに打ち込む小学校3年生・名作名文のあらすじ書きスタート♡

【6月の漢検8級・数検9級・英検3級で合格を目指す！コロナ休暇を有効に！】

百マス計算は余りありの割り算Cに挑戦中です。コロナ休暇で始めた“面積迷路スピード編”終了。“天才ドリル 点図形”も2冊終了。幹を太く！とはじめた2年生の復習、Z会の“ハイレベル文章題2年生”、文理の“トップクラス算数2年生”も終了。くもんの3年生算数を終了。現在、清風堂3年生上級編と算数検定9級の過去問に挑戦中です。漢字の書き取りは3年生まで進み、漢検8級の過去問に取り組み、6/13に受験。過去問では137点が最高得点でしたが…。受験後の本人の感想は…「全部書けた！」というものでした。試験前日に、解き終えた過去問の間違いを、すべて書き出して練習していました。同じ漢字を間違っていることに自分で気づき、書き順から丁寧に辞書を使って見直しをして準備！結果を楽しみにしているようです。くもんの国語3年生“文章の書き方”に進みました。4月から、“名作名文のあらすじ書き”を1時間とって取り組んでいます。回を重ねるごとに上達しているようです。“イッキよみ”は、4年生まで進みました。Q&Aがおもしろいようです。英語は、オンラインで文法対策してもらい…だんだん熟語も覚えてきているのか、読み上げて熟語を見つけられるスピードが上がってきました。英検3級も今月受験です。勉強以外にも沢山のことに取り組むことができたコロナ休暇。「今できることを楽しみながらやろう！」と前向きに過ごすことができました。

☆ア+: 折り紙・切り絵・お絵描き・工作が大好きな年長さん・ひらがな・カタカナ・計算に毎日取り組む♡

【6月のかず・かたち検定ゴールドの合格目指す！対策指導・過去問に取り組む！】

算数ブームが続いているアナ。計算スピードも上がり、くり上がり・くりさがりの計算まで進みました♡学んだことの確認テストで、6月に“かず・かたち検定ゴールド”にチャレンジします。検定対策授業、過去問にも取り組み準備は順調です。本人も、テストを楽しみにしているようです。ひらがな・カタカナの書き取りも習得し、くもん1年生に取り組み始めました。今までとは違う問題形式で新鮮に感じているのか、楽しんで取り組んでいます。国旗の絵本で国名を読み上げることにハマリ、地球儀や地図にも興味を示すように…白地図で色塗りしたり…姉も混じり家族で楽しんでいます。かたちパズルは最終段階の“博士編”に突入！縮図の分割線にややてこずっている様子。あきらめず考え抜けるように声掛けに気を付けています。朗読暗唱は、週1回ペースで合格し調子がでてきました。姉同様、コロナ休暇期間に「今できることを楽しむ！」の気持ちでいろいろなことにチャレンジ！また、毎日コツコツお勉強する習慣もつき、ゆとりある有意義な時間を過ごせたと思います。

## アンが読んでいる本

### 『ふしぎな駄菓子屋 銭天堂』

作：廣嶋玲子 絵：jyajya 偕成社

### 『氷の上のプリンセス ジュニア編』

作：風野 潮 絵：Nardack 講談社青い鳥文庫

### 『空想科学読本』

作：柳田理科雄 絵：藤島マル つばさ文庫

### 『自分で解決できるようになる 友だち関係』

まんが・イラスト：ひらたともみ 監修：柴崎嘉寿隆 旺文社

## ア+に読んでいる本(ア+が読んで欲しいもの)

### 『ぶたのたね』

作/絵：佐々木マキ 絵本館

### 『ねむいねむいねずみ』

作/絵：ささきまき PHP 研究所

### 『あなたのいえわたしのいえ』

作/絵：加古里子 福音館

### 『うきばちです』

作/絵：河端 誠 BL 出版

## パパ日記 休校～自粛期間

3月から学校や幼稚園が休校となりこれまでに経験したことのない休み期間に突入することになった。最初は休みの日に家族で山などへ出かけていたが4月に入ってステイホームとなり完全に出かけない毎日を過ごすようになった。当初は慣れていくかどうか心配であったものの徐々にリズムを掴んでいったようだった。そのうちに休日のルーチンもできあがった。ある韓国料理店(絶品!)のテイクアウトで昼食を食べ、それから映画鑑賞、さらに夕飯は子どもたちとカレーを作るといったものである。たいしたことではないが思ったよりも家族で楽しめた。2か月間毎週テイクアウトをしていたらお店の人も覚えてくれて少し話もするようになった。意外なところで新しいつながりができ自粛明けには是非ともお店で食べたいものである。休校や自粛で大変な状況となったがそれに順応していく姿はたくましくもあり自分の心配は杞憂であった(姉妹喧嘩は今までどおりたくさんしていましたが…)

## からだをつくる・やすめる ～生活習慣をちょっとだけ変えてみる～

新型コロナウイルスで自粛生活が続く…「コロナ太り」の解消法をネット上でよく見かけます。以前紹介した、プランク、子どもと一緒に縄跳やトランポリン…などなど枚挙にいとまがないですが、家事をしているとき、椅子に座っているとき…生活習慣をちょっと変えるだけの簡単な方法をご紹介します。

- 1・いすに座るときは背もたれを使わない。背筋をまっすぐに保つ。
  - 2・立っているときに、かかと上げ下げでふくらはぎの筋肉を刺激する。
  - 3・立ってでも、座ってでも、お腹を引っ込めたまま普通の呼吸してみる。
- 気付いたときに、10回・20回など回数をきめて取り入れてみてください。

ちいさな努力の積み重ねできっと効果があらわれます♡※無理は厳禁です。



## ●4歳～6歳（年少～年長）小学校入学準備

### ●月曜と金曜 午後3時～5時

「～読み書き算数・思考力～」基礎から丁寧に

◆石川塾では小学校に入学したときに、教科学習にスムーズに取り組めるように「かず」「りょう」「かたち」の概念が理解できるところから「すいり」まで、**学習の基礎を丁寧に**教えていきます。また、子どものつまずきや、理解度に合わせた指導をしていきます。

～幼児クラス(就園児)の授業の内容～※親子で一緒に学ぶクラスです

- ◎あいさつ…背筋をのばして元気にごあいさつ
- ◎朗読暗唱…楽しみながら、リズムよく朗読暗唱♪
- ◎ことばの取り組み…ひらがな・カタカナの読み書きの練習、言葉遊び
- ◎かたちの取り組み…パズル、パターンブロックなどで遊びながら学びます
- ◎かず・りょうの取り組み…くりあがり・くりさがりの計算まで進みます
- ◎かず・かたち検定の取り組み…学んだことをテストで確認！検定対策あり！
- ◎就学前の取り組み…入学前に、読み書きや計算、時計の見方・順序・前後左右の位置などの知識を身につけます



## ●2歳～3歳 親子で！入園準備

### ●月曜と金曜 午前10時～12時

～幼児クラス(就園前)の授業のながれ～※親子で一緒に学ぶクラスです

- ◎あいさつ…背筋をのばして元気にごあいさつ
- ◎絵本のよみきかせ…おすすめの絵本
- ◎ことばの取り組み…カードなどを使いことばを学びます
- ◎かたちの取り組み…パズル、つみきなどで遊びながら学びます
- ◎かずの取り組み…つみきやブロック、知育玩具などで学びます
- ◎りょうの取り組み…つみきやブロック、知育玩具などで学びます
- ◎その月・季節の取り組み…季節カードや本などで学びます



### ●「小学校受験サポート」年少から・時間はご相談ください

(公財)日本数学検定協会認定資格「幼児さんすうインストラクター」

◎プロフィール◎

★講師:わたなべ みつき

- ★2児の母(小学3年生…小学校受験 年長…幼稚園受験 女の子2人)
- ★他に看護師国家資格あり 大学病院・療養型病院に勤務経験
- ★石川塾に6年前から親子で通塾し、石川塾長のノウハウを教わる
- ★石川塾にて「ワークショップ」「Weekly・Monthly」「千の声 VOICE」を担当
- ★子どもに教えているうちに、教えることが楽しくなり上記資格取得のためインストラクター養成講座を受講し「幼児さんすうインストラクター」となる



**生徒募集中！紹介者には謝礼あり！**

体験授業は3回無料です。まずは授業体験を…お待ちしております。  
お問合せは…TEL042-710-5768 読み書き算数 石川塾  
担当:ワタナベミツキ

## 子ども・お母さんたちが借りて読んでいる本(2019年8月～2019年10月)

<p><b>2019年8月</b>                      身体のいいなり                      おしりたんてい みはらしそうのかいけつじけん</p> <p><b>2019年9月</b>                      おしりたんてい                      かいけつゾロリのなぞのうちゅう人                      勉強なんてかんたん                      レモンをお金にかえる方法                      ウォーリーをさがせ！                      ウォーリーのふしぎなたび                      昆虫のサバイバル                      だるまちゃんとかみなりくん                      でんしゃでいこう                      ちびまるこちゃんの作文教室                      おしりたんてい あやしいたんていじむしよ                      失われた世界                      海馬                      脳は疲れない                      カブトムシ クワガタムシのひみつ                      かいけつゾロリつかまる                      さんすうの「分数・小数」がミルミルわかる本</p>	<p>ロボット世界のサバイバル                      おたまじゃくしの101ちゃん                      からすのパンやさん                      かいけつゾロリの大かぞく                      夜回り猫1                      シャーロック・ホームズ恐怖の谷                      世界の歴史メソポタミアとエジプト                      かいけつゾロリとなぞのひこうき                      おしりたんてい カレーなるじけん                      国境のない生き方                      ざんねんないきもの事典                      かいけつゾロリのきょうふのゆうえんち                      おしりたんてい むらさきふじんのあんごうじけん                      あきのほし                      ふゆのほし</p> <p><b>2019年10月</b>                      ワンピース ローグタウン編                      ちっちゃな科学                      「のび太」という生きかた                      ヴィオラ母さん                      世界の果てでも漫画描き キューバ編                      世界の果てでも漫画描き エジプト・</p>	<p>シリア編                      失敗図鑑すごい人ほどだめだった                      ドラえもん 読解力がつく                      ドラえもん すらすら作文が書ける                      鳥のサバイバル                      ひなちゃんとふりかえる平成史                      失敗図鑑すごい人ほどだめだった                      イッキに読める 宮沢賢治                      恐竜世界のサバイバル①                      アマゾンのサバイバル                      魚                      0歳からの子育て技術                      密室                      密室II                      砂漠のサバイバル                      あるくやまうごくやま                      でんしゃのたび                      手にもっていこう                      かいけつゾロリのゆうれいせん                      こんちゅう新型ウイルスのサバイバル                      アマゾンのサバイバル                      やばい日本史                      おしりたんてい カレーなるじけん                      なんかへんな生きもの</p>
--	---	--

## 📖ぶらい石川ライぶらい📖

### ブレイディみかこ「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」新潮社 を読んだ(二人の)感想

◆コロナ休校前の2月、息子が初対面の小中学生を前に「僕の母国はメキシコで、僕はハーフなんですけど…」と話している姿を目の当たりにして、ちょっとした違和感を覚えたことがあった。

息子の出生時にメキシコに住んでいた私たち家族は、この夏で日本に移住して6年になる。当初は主人と息子が日本の生活になじめるか、言葉は大丈夫かと心配が付きなかつたものの、息子も5年生になり最近ではそんな心配もぐっと減っていた。おまけにもともとメキシコで暮らすつもりだったので、息子は日本では私の苗字を名乗っている。だから、私の中で息子はいつもメキシコ人と日本人の子供であることに変わりはないのだけれど、それが「ハーフ」であることを意識する機会はずいぶん減っていたのだと思う。

そんな折、息子が私の前で「ハーフ宣言」するのを聞いて、息子は新しい集団の中に入る時、いつもこうして自分のバックボーンをどのタイミングで伝えようか、彼なりにいつも考えているんだなということにハッとした。別に絶対伝える必要はなくても、言わないのもなんとなく落ち着かなくて、自分を知ってもらいたい気持ちもあって、こうして空気を読みながらタイミングを見計らっているんだなあ、と…。自分にとって「ホーム」である生活が長くなり、100%日本人の私には、ハーフとして育つ息子のこうした気持は意外と分かっていないんだと感じた瞬間だった。

こんな私もメキシコ在住時は、街を歩いているだけで「チニータ」(中国人という意味。言葉自体には差別的要素は含まれない)とからかわれるように言われてカチンと来ることや、地下鉄の中でジロジロ見られてアウェー感でいっぱいになることが少なからずあり、そういった不愉快な態度をとる人達が、あまり豊かでない階層の人たちであることに複雑な気持ちを抱いていた。そして、アジア人をジロジロ見たりするのは、メキシコの国際化が進んでいないからだと思っていたのだが、もっと国際化が進んでいるかに見えるイギリスにおいても、「国際的」とか「多様性」はそんなにポジティブな現象を引き起こしてはいないことを知った。そこには国籍や宗教の違いだけでなく、貧富の差が存在し、子供たちの多くは「多様」であるが故にもたらされる問題に頭を悩めたり、疑問を感じたり、時に心を痛めながら自分の居場所を探しているということを知った。

メキシコ人と日本人とハーフ。時に言い争いを始める我が家も「多様性」がぶつかりあう小さな社会なんだろうと思う。そうだとすると、メキシコと日本、双方を一番平等に受け入れられているのは、間違いなくハーフである息子である。コロナ禍による休校とテレワークで家族密接生活が続く、日々息子がもう思春期に差しかかっていることを実感する今、我が家の在り方も少しずつ変わっていくのだろう。今さら綺麗事は言えないけれど、私自身は、多様性や変化をもう少し楽しみながら受け止められる余裕を持てるようになりたいと思う。

●キョウコさんからの VOICE■ (もう一人は前号掲載)

## <<石川塾の肝心要 ~要旨要約~>>

### □石川塾の肝心要 ~自分で生きていくための要旨要約~

皆さん要旨要約をご存知ですか？石川塾では授業の前に要旨要約をやります。まず全体を通してどういった物語なのか20字程度で書きます。そうして具体的に、またこの物語が伝えたかったことを200字で書くというものです。石川塾では夏目漱石の夢十夜の第一夜が最初の題材です。この物語は男が死んだ女を100年待つ話とでもいいでしょうか。すごく独特なお話で初めの題材としては難しいかもしれません。ただ慣れてくるととても面白いものになります。まず自分では手に取らないような本を読めてそれが知識に繋がりとそこから大切な部分を抜き出しそれが取捨選択の上達に繋がります。また本から学ぶことは沢山あります。例えば私がすごく考えさせられた題材は“人にはどれだけの土地がいるか”という物語です。自分が歩いた分だけ土地をもらえる、そのかわり夕暮れになるまでに歩き始めた場所に戻って来ることが条件というお話です。この物語では人の強欲さがわかりやすく描いてありとても読みやすく考えさせられるものになっています。沢山の本を読み自分の考え方が変わることさえあります。すごく自分にとってプラスになるもので石川塾ならです。物語以外にも論文のようなものもあります。論文といってもそんなに堅苦しいものではなく私たちの生活をよりよくしてくれることが書いてある参考書みたいなものです。齋藤孝の本です。この本で私の考え方はガラリと変わりました。“やるべきことはやろうと思ったらすぐ行動する”私はこれを読むまでギリギリまでやらずにいた人間でした。さらにやるまでにすごく時間がかかっていました。けれどこの本にやろうと思ったらとていえず体を動かし始めるといいということが書いてあったため実践してみるとすごくやる気になりました。こんな本も要旨要約します。悪い習慣や自分の考え方が変わり要旨要約の力がつくなって一石三鳥くらいありますね。石川塾では勉強だけでなくこういった力もつけさせてくれます

#### ●マイ先生からの VOICE ■

### □石川塾・塾生の 200 字要旨要約文 (齋藤孝「理想の国語の教科書」青版/赤版/緑版より)

#### ■シェイクスピア「マクベス」第一幕 第七場

**一文要約:**夫人がマクベスをけしにかけて、王ダンカンを殺す話。

**本文抜粋:**もうやめにしよう、王は栄進を計ってくれたのだ、おかげで上下の気受けもよい、せっかく手に入れた新しい金らんの美服、むざと脱ぎすてるにはおよぶまい。考えていらっしゃる御自分と思いきった行動をなさる御自分と、その二つが一緒になるのを恐れておいでなのですね？こちらは王の死を歎き、大声にさわぎたてているのに？よし、腹を決めた、体内の力をふりしぼって、この恐ろしい仕事に立ち向かうぞ。

#### ●ナオキ君(小5)の要旨要約■

#### ■トルストイ「人にはどれほどの土地がいるか」

**一文要約:**パホームが土地を欲張り、走れなくなって倒れて死んでしまう話。

**本文抜粋:**「わたしの土地です。すきなところをおとり下さい」《少しでも涼しいうちに歩くほうが楽だ》《こちらは十分にとった》と考えた。暑さがきびしくなってきた《一時間の辛抱がとくになるんだ》《おれは欲をかきすぎた、もうおしまいだ》《土地はたくさんとった》《おれは自分を減ぼした！走れまい》彼は死んでいた。頭から足まではいるよう、墓穴を掘った、そして彼をそこに埋めた。 ●ユウキ君(小6)の要旨要約■

#### ■夏目漱石「夢十夜」第一夜

**一文要約:**死んだ女が百年後、百合になって男に逢いに来る話。

**本文抜粋:**女が死に際、男に対して百年後また逢いに来ると誓った。男はその言葉を信じ、墓の傍らに坐って何十年と待った。それでも百年がまだ来ない。すると、自分の方へ向いて青い茎が伸びて来た。またたく間に成長した百合の花弁に、ぼたりと露が落ちたので、花は自分の重みでふらふらと動いた。男は露の滴る、白い花弁に接吻した。自分が百合から顔を離すと、空に暁の星が一つ瞬いていた。この時初めて、百年はもう過ぎていたことに気づいた。 ●アミさん(中2)の要旨要約■

#### ■夏目漱石「坊ちゃん」

**一文要約:**おれが生徒たちに嘘をついて罰を逃げるくらいなら、はじめからいたずらをするなど教える話。

**本文抜粋:**「バツタを知らないのか、見せてやろう」と言ったが、はき出してしまっって一匹もいない。小使を呼んで「さっきのバツタもってこい」と言ったら「すててしまいましたが、拾って参りましょうか」と聞いた。「すぐ拾ってこい」と言う小使は急いでかけだしたが、やがて半紙の上へ十匹ばかり載せてきて「お気の毒ですが、あいにく夜でこれしか見当たりません。あしたになりましたらもっと拾って参ります」と言う。おれはバツタの一つを生徒に見せた。 ●ミオさん(中2)の要旨要約■

#### ■ラブレー「ガルガンチュワ物語」ガルガンチュワの幼年時代

**一文要約:**ガルガンチュワが国の幼い子供たちと同じようにいたずらをして過ごす話。

**本文抜粋:**ガルガンチュワが三歳から五歳になるまでは、父の命令通りに、あらゆる規律に従って養育されたが、この時期は、国の幼い子供たちと同じようにして送られた。つまり、飲んだり、食べたり、眠ったりしていた。毎日のように、泥水のなかを転げたり、鼻面を真黒にしたり、顔を汚したり、靴の踵を潰したり、蠅を相手に欠伸を連発したり、欣んで蝶々を追いかけていたりしていたが、蝶々と言え、父君グラングウジェは蝶々国を支配していたのである。 ●ミクさん(中3)の要旨要約■

※ ( ) 内は提出時の学年です。

## << 読み書き算数 石川塾 からの VOICE >>

□個別指導:小学受験・中学受験・高校受験・大学受験への道を開き:良い仕事をするために選択肢を広げます

▲生涯にわたる学習能力:音読力・暗記力・ノート力・作文力・読解力・コミュニケーション力:生きる力をつけます

□教室で読書タイムを毎回 15~20 分サービスしています/本好きになる!「おもしろい本」をイッキに読もう!

▲読書タイム専用の国語のノート(10ミリ方眼罫)を御用意ください▲ポイントが貯まると図書カードと交換▲

**高校入試国語の80%は小説評論古典に関する長文読解問題です/漢字読み書き20%**

**国語はもちろん!英語数学も“読解力”です**

**(読解力をつける国語コース)♡町田高校(レベル)を受験希望する小学生・中学生のための♡町高専科**

**朗読暗唱(2・3歳園児から)**

石川塾長選:暗唱用詩歌/音読プリント/国語力が伸びる1分間速音読/1分で脳を鍛える速音読

**名作教室(小学1年生から)**

イッキによめる!名作選(クイズ)/読解力がグングンのびる!ゼッタイこれだけ名作教室(あらすじ)

**要旨要約(小学3年生から)**

嵐の中の灯台(全18篇)/理想の国語教科書(全3巻:全86篇)/使える!「徒然草」(古典全18篇)

**入試問題(小学5年生から)**

中学入試国語のルール/秘伝中学入試国語読解法/(小説入門・評論入門のための)高校入試国語

**<「英語」休日二日間集中講座>都立高校入試「英語」問題の攻略 英検3級・英検準2級・英検2級対応**

英文読解:7/23と7/24…1日8時間×二日間=16時間(都立高校過去問)

英文読解:8/10・11・12…1日8時間×三日間=24時間(都立高校過去問)

♡**中学・高校入試の図形ワーク(副教材作成)**♡平日・土曜開講♡

□**単位換算定規の作成と使い方/単位換算の基礎編**

□**ぺったんコンパスの作成と使い方/円周率/円の面積**

□**円の転がり盤の作成/円の転がり問題**

□**円柱・円錐・円錐台の展開図の作図/円柱・円錐・円錐台の回転体の作成**

□**立方体の切断面の作成/立方体の切断面の基礎問題**



□**塾の遠足「ききたい」「たずねたい」「参加したい」(いつでもなんでも気軽にコール/☎042-710-5768)**

●わが子と遊ぶ/わが子に学ぶ/わが子と歩む/わが子の歩み/鎌倉逗子葉山だれもしらない土の道歩く/塾の遠足はほぼ毎月家族友だち知人どなたでも参加できます/2歳からの読み書き算数塾・大人のための石川ゼミ/本がたっぷりの教室/夢中な本/午前・午後・夜間いつでもお越しください/お友達の写真はホームページでご覧になれます ■「読み書き算数塾石川ゼミ」検索■

□**はじまい(脱いだ五足の靴のお母さん方と)**

●読み書き算数塾・石川ゼミに親子で入塾し、石川剛先生から勉強だけでなく、子育てのヒントやからだを作ることなど多岐に渡る教養を頂戴しております。石川塾長を慕い集まってくくださった私を含め5名のお母さまとともに石川ゼミで出会った沢山の VOICE を発信したいと思い立ち上がりました。この千の声を手に取ってくださった方のお役に立てていただければ幸いです ■編集長・渡邊光樹からの VOICE■

□**ホームページの「new 体験学習ガイド」欄にミツキ先生の「weekly・monthly」を掲載していますので御覧ください**

●編集兼発行人・石川剛からの VOICE●水村美苗「日本語が亡びるとき—英語の世紀の中で」文庫版の要旨を掲載しましたがいかがでしたか(要約:渡邊光樹)/日本語に興味を持たれた方は「日本語で読むということ/書くということ」を/更に彼女の最初の小説(夏目漱石の絶筆『明暗』の続編)『続 明暗』と/『本格小説』をお勧めします ■絵:kumi■

□**石川塾長に「ききたい」「たずねたい」「参加したい」(いつでもなんでも気軽にコール/☎042-710-5768)**

□**<2020年夏号「千の声 VOICE」第9号>令和2年6月25日発行■HP「千の声ボイス」にバックナンバーを掲載**

■〒194-0021 町田市中町1-30-8 菅井町田ビル2F/町高通り・税務署近く■☎042-710-5768